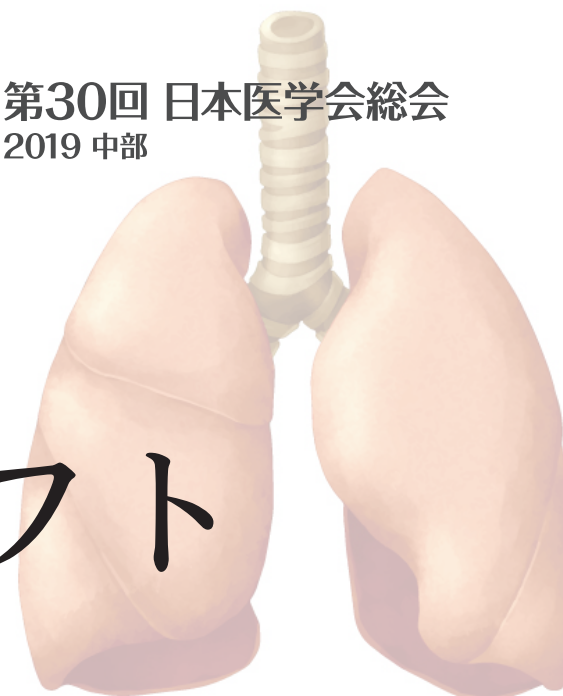


# 肺がん治療の パラダイムシフト



## 日時

2019年  
4月29日(月・祝)  
12:25 ~ 13:15

## 演者



### 長谷川 好規

名古屋大学大学院医学系研究科  
病態内科学講座 呼吸器内科学分野

## 会場

### 第9会場

名古屋国際会議場3号館3階  
国際会議室

#### 【略歴】

1980年 徳島大学医学部医学科卒業  
1987年 米国カリフォルニア大学医学部ロサンゼルス校研究員  
2002年 名古屋大学呼吸器内科・講師  
2007年 名古屋大学大学院医学系研究科病態内科学講座呼吸器内科学分野・教授  
現在に至る。  
※この間、名古屋大学総長補佐、医学系研究科副研究科長、医学部附属病院副院長を兼務  
現在 日本内科学会(副理事長)、日本呼吸器学会(理事長)  
第30回日本医学会総会2019中部(総務委員長)  
第116回日本内科学会総会・講演会会長

本ランチョンセミナーは整理券制となります。

整理券は下記ランチョンセミナー整理券配付所で配付しますが、予定枚数終了次第締め切りますのでご了承ください。

【配付日時】4月29日(月・祝) 7:30~11:30 【配付場所】名古屋国際会議場1階中庭 騎馬像付近

整理券は、おひとり1枚限り、当日分のみの配付となります。整理券は、セミナー開始後に無効となります。

共催：第30回日本医学会総会 2019 中部

我が国では、2人に1人ががんになり、3人に1人ががんで亡くなると報告されている。しかし、1970年代との比較では罹患率は約4.2倍に増えているが、死亡率は約2.5倍の増加である。これは、医療の進歩により診断技術の向上や治療法の改善が進み、がん罹患しても死亡しなくなったことを示している。一方、肺がんは、我が国のがん死亡の1位を占めており、年間罹患数に対して年間死亡数が64%を占め、5年相対生存率も膵臓・胆嚢がんに次いで低く、悪性度の高いがんである。進行肺がんに対する治療は、長らく殺細胞性抗癌薬2剤の併用療法が基本であったが、2000年半ばからの遺伝子変異に基づく分子標的薬の開発、続くPD-1/PD-L1阻害による免疫チェックポイント阻害薬の開発と続き、その治療法がめまぐるしく変化している。その結果、進行肺がんの平均生存期間は約1年であったものが、現在では2年、3年と確実に延長している。本セミナーでは、肺がん化学療法のこれまでの歴史を振り返りながら、がんゲノム検査に基づく肺がん治療と肺がん治療における免疫チェックポイント阻害薬の位置づけについて解説する。